安曇川流域資源を活用した起業家精神育成の推進

大津市立葛川小・中学校　KCLプロジェクト

1. はじめに

「豊かな水と流域資源に囲まれた母校を守りたい」それが大津市立葛川小・中学校KCLプロジェクトに込められた願いである。弊校は、比良山系と丹羽山地の山間に位置する小さな学校である。学校の脇には安曇川とその支流が流れ、かつて山林を生かした炭焼きや木材加工で栄えた地域だ。

仕事のなかに、切り出した木材を筏に組み河川を流して都まで運ぶ技術、筏流しがあった。筏を運ぶ仕事に従事した人は筏師と呼ばれ、地域の花形の職業だった。時代の流れと共に山間の産業は衰退し、戦後まもなく筏流しも筏師も山間の地域から無くなった。しかし、安曇川流域では伝説の筏師「シコブチさん」がいくつもの神社に祀られ独自の水文化「シコブチ信仰」が伝わっている。河童退治の伝承もある。時代の変化はあれ、豊かな水資源から固有の水文化を持つ地域が安曇川流域である。

他方、人口流出や少子高齢化は止まることなく、平成が幕を下そうとする頃、学校は廃校の危機を迎えた。そこで、地域のことを知ってもらい〈Know〉、来てもらい〈Come〉、住んでもらう〈Live〉ための活動、KCLプロジェクトが立上がった。古来より伝わる水文化や、自然の豊かさを発信し、地元地域の活力を高めることが、子どもたちの願いである。学校では、この地域おこしを教育活動に落とし込む模索が始まった。流れる水のように時々刻々と変化する時代と対話しながら、流域資源を社会の価値となるイノベーションに繋げる。廃校の危機と向き合い、生き残りをかけたカリキュラム開発が新しい時代を創る人材を育む。それが大津市立葛川小・中学校KCLプロジェクトの「安曇川流域資源を活用した起業家精神育成の推進」である。

葛川小・中学校の児童生徒

KCLプロジェクト

大津市立葛川小・中学校へ通う児童生徒は、児童生徒数減少による廃校の危機から学校を守るため、知ってもらい「Know」来てもらい「Come」住んでもらう「Live」活動“KCLプロジェクト”を推進しています。

KCLプロジェクト

2. 安曇川流域資源教材化に至る道程

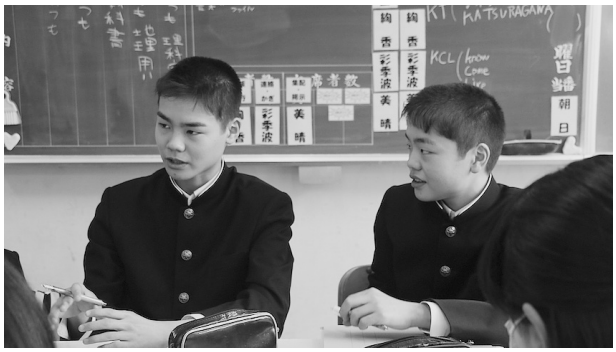
2013年、過疎に苦しむ地域の実状を目の当たりにした子どもの呼び声から「地域のためにできること」と題した懇話会が始まった。地域住民、保護者を交えた懇話会は、人口減少に伴い活力を失いつつある中山間地域の緒課題と向き合うものだった。年に一度行われる懇話会で出た意見をもとに、子ども達は取組を計画し形にした。交流人口増加を願ってパンフレットやカルタ、ゆるキャラを制作したり、ハザードマップを手掛けたりと、地域おこしが学校行事として定着を見せる。

時を同じくして、葛川小・中学校は廃校の危機を迎える。校区内からの新入学予定者が向こう3年間いなくなったのだ。しかし、教育資源豊かな学校の存続を願う声は少なくなく、やがて市内全域から児童生徒を受け入れ可能とする小規模特認校の認可を得るに至った。地域外からの児童生徒が全校児童生徒の半数を

占めるようになると、一様でないふるさとを前提としたカリキュラム開発に着手した。

2018年、地域おこしを総合的な学習の時間に位置付け、小中学校9年間の連続した学習がスタートした。自らの郷土を守るための活動として掲げられた教育推進の柱が「安曇川流域資源を活用した起業家精神育成」である。そしてKCLプロジェクトが立上がった。地域のことをまだ知らない入学したばかりの新入生は、川で遊び、イモリを見つけ、水流で丸くなった石に絵を描く。地域探検を看板に、五感で触れるふるさとを原体験として身体に刻む。中学年になると地域を調べる。集落を歩き、地図を作り、神社やお寺を掃除する。また、伝統行事や地域の伝承を住民に話してもらう。かつての原体験と集落の息づかいは結びつき、やがて親しみへと変化する。高学年になると地域の緒課題と向き合う。過疎に苦しむ地域を、流域資源で解決できないか考え形にする。「知り、調べ、考える。」そんな6年間を経た子どもたちは、ふるさとを想う中学生となる。中学生が中心となる地域おこしがKCLプロジェクトとなり、2022年で5年目を迎えた。

安曇川で水中昆虫を探す小学生



地域課題と向き合う中学生

3. 子どもの活動を飛躍させる力

2018年、プロジェクトの推進力を得るため、地域役員や保護者、学校長の参加するKCLプロジェクトの推進団体「つなげる会」を設立した。年3回行われるつなげる会の運営は生徒会の大きな仕事となった。2019年、つなげる会で得た活動支金を元手に、プロジェクトのウェブサイトやポスターを制作し、道の駅（びわ湖大橋米プラザ）や役場に掲示し、全国コンペの場で広報活動を行った。ウェブデザイナー（髙橋　静）やCM製作会社（高映企画）をパートナーに迎え、中学生ばなれした活動を展開する第1期生が誕生した。

2020年、天然染め工房（手染め屋）に指導をいただき、鯖街道や近江商人にゆかりのある紅花染めの素材を開発した。染色素材をもとに、天然染めのアクセサリーを京都の大学生（京都光華女子大学）と協同開発し、オンラインストア（Creema）を開設した。

2021年、地元地域に伝わる筏流しを再現し、琵琶湖筏旅を実現。山間から筏で運んだ木々は、テーブルベンチに加工し道の駅に寄贈した。地元工務店（松井建設）のサポートを受け、安曇川流域の水文化と資源を街に運んだ。

2022年、安曇川流域の植物や、地域信仰に登場する河童のガワタロウをモチーフにハンコを製作した。製作資金はクラウドファンディングを利用して調達し、京都の老舗ハンコ制作会社（田丸印房）やイラストレーター（西尾　界太）とチームを組んで商品化を実現させた。クラウドファンディングの達成だけでなく、ガチャガチャにつめたご当地ハンコの商品は道の駅に「自然ガチャ」と銘打って設置され、一月足らずで完売を迎えた。

また、学校脇の安曇川支流において、小型小水力発電の建設を計画している。小水力発電事業を手がけるコンサルティングファームと発電事業所が学校にコミットしてくださり、2023年の稼働に向け学習の場が始まっている。生み出した電力は、オオサンショウウオが自生する学校周辺の水域保全に活用される。固有種の存在は地域の希望である。安曇川流域の固有性を守ることが、社会全体の多様性に繋がるのだと信じている。

後に続く児童生徒もまた、たくさんの応援を受け、安曇川流域資源から社会の価値となるイノベーションを創造すべく、課題を見出し、考え、繋がり、新たな時代を創る人へと成長している。安曇川の泥による陶器作りや学校林のメープルシロップ開発など、その他のプロジェクトはKCLプロジェクトウェブサイトよりご覧ください。

KCLプロジェクトウェブサイト http://kcl-project.com/

KCLプロジェクトを支える「つなげる会」

高映企画とキャッチコピー開発

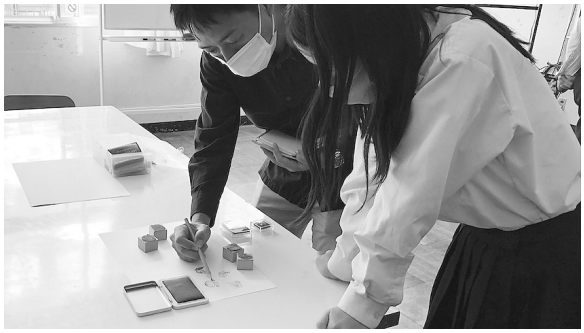
道の駅琵琶湖大橋プラザ

天然染公房手染め屋で染色体験.

紅花染め素材を開発

松井建設とのイカダ制作

筏流しの再現



田丸印房とのハンコ開発

道の駅設置された自然ガチャ

KCLプロジェクトウェブサイト

kcl-project.com

ウェブサイトQRコード

4. 開かれた活動であるために

地域内に閉じたり、関わっている人だけが満たされる活動とならぬよう注力している。だからこそ、大学や専門家、事業所にコンタクトをとり、積極的にプロジェクトへの参加を呼びかけた。子どもたちの役割は企画することである。企業で言うところのマーチャンダイザーやディレクターといったところだ。担任の役割はプロデューサーである。ただ、弊校は山間のへき地校であり、ふらっと簡単に立ち寄ることのできない学校だ。それもあって、オンラインの活用が活動の推進力となった。依頼や打ち合わせだけでなく、広報や販売の場もオンライン上に持つことで、へき地校だからといってできないことはなかった。流域資源をもとに社会へ価値を届けられるよう、子どもは頭をひねり、大人に力を借り、プロジェクトを推進した。学校は、子どもたちの背中を押し、これからの時代を創る人を育成できるよう、時勢を感じ、社会に開かれた学校であることに留意した。

子ども達の活動は、マスメディアを通して広く発信されてきた。特に2021年度実施した琵琶湖筏旅は、地域関係者だけでなく、新聞社やラジオ局、テレビ局の方にも注目いただいた。筏旅のゴールである道の駅には、筏流しのポスターが壁一面に貼られ「おかえり」と書かれた手作りの横断幕が飾られた。保護者や地域の方、先輩や後輩、有志のサポーターや専門家の方々が手を振り、3日間筏を漕いだ子ども達を迎えた。それはこれまで子ども達を支え、力を貸してくださった仲間達だった。マスメディアやウェブサイトを通して発信される情報から、学校の取組を応援してくださるサポーターや、寄付を申し出てくださる方も現れた。

小さな学校の、小さな懇話会から始まった取組が、多くの仲間や関係者を増やす活動へと広がった。流域資源を活用し、その地に根ざした子どもを育成することが、巡り巡って中山間地域の活力を高め、水循環系を支えるコミュニティを育てることに繋がるのだと、その波及効果の大きさに驚いている。

オンラインでウェブサイト制作

取材を受ける生徒

びわ湖イカダ旅

道の駅に寄贈されたテーブルベンチ

5. 中山間地域の学校における未来

水源に近い山間の学校の統廃合は続き、2020年に弊校が県内最後のへき地小・中学校となった。一方、小規模特認校制度の認可を得る学校は増加している。地域外から通う子どもを預かる学校にとって、子どもたちのふるさとを想う心を育むことは容易ではない。その難題に対する処方箋のひとつが、地域の水循環系を教育資源と捉えたカリキュラム開発ではないだろうか。なぜなら、校区内に水路や水域のない場所などなく、私たちの暮らしは水との結びつきを切る事ができないからだ。

弊校は廃校の危機という切実な課題が眼前にあり、安曇川流域資源に目を向けるに至った。そんな偶然始まった取組によって、水資源のイノベーションに取組むことが、その地に根ざした暮らしを考えることと、極めて親和性の高い教材になるのだと気付かせられた。安曇川流域資源を活用した起業家精神育成の推進は、弊校が存続している今だからできる挑戦であり、ひとつのロールモデルに成り得ると考えている。

6. さいごに

小規模特認校設置にあたり教育推進の柱として設定された「安曇川流域資源を活用した起業家精神育成の推進」は、本格運用5年目を迎え、弊校教育課程における礎となった。起業家精神とは、事業創造や新商品開発などに高い創造意欲を持ち、リスクに対しても積極的に挑戦していく姿勢や発想、能力などを指す起業家精神を意味する。つまり公教育での起業家精神の育成とは、新たな価値を創造する社会において必要な資質を育むものと言える。弊校では、起業家精神育成を「現状に課題意識を持ち、見出した課題の解決に向けて積極的に挑戦していく姿勢や発想、創造力を高めること」と解釈し、キャリア教育に紐付けながら、カリキュラムマネージメントの確立を目指した。また、校区内で育つ地域の子どもだけでなく、小規模特認校制度を用いて弊校へ通学する校区外の子どもたちにも、地域を知り関わる機会を深めている。なぜなら、子どもたちによる地域活性化を教材化する前提として、ふるさとを大切に想う心の醸成は不可避だからだ。

ふるさとや母校の課題に呼び掛けられた子どもたちは、ふるさとを大切に想う心に応える主体となって、知恵を絞り、行動し、児童生徒数減少による廃校の危機から学校を守るため、地域を知ってもらい、来てもらい、住んでもらうための取組「KCLプロジェクト」を推進するのである。

これまでの歩みを振り返り、長期計画と短期計画の作成が取組の推進に欠かせないものとなってきた。2017年に子どもたちが作成した、地域の活力を高める大きな3つの流れがある。情報発信、商品開発、イベント企画である。この三本の方向を年度単位で計画し、更に前期と後期で評価改善を行いながら学年ごとの取組を推進した。2018年に情報発信、2019年に商品開発、2020年にイベント企画につなげるという大枠に沿い、子どもたちの自由な発想で地域活性化の道筋を歩んできた。地域を想い、今を見つめ、課題を見出し挑戦する。

小学校から中学校までの連続した学びのなかで、ふるさとを想い、社会との接続というひとつの着地を迎え、子供たちは葛川小・中学校を巣立っていく。きっと子どもたちは卒業後もなお、新たな課題を見出し挑戦し、新たな時代の創り手となっていくことだろう。終わりのない希望に満ちた創造社会の扉を開くことが、大津市立葛川小・中学校KCLプロジェクト「安曇川流域資源を活用した起業家精神育成の推進」に込められた願いである。

大津市立葛川小・中学校　KCLプロジェクト